

最高の人生の見つけ方

2008(平成20)年5月18日鑑賞<梅田ピカデリー>

★★★



監督・製作＝ロブ・ライナー／脚本＝ジャスティン・ザッカム／出演＝ジャック・ニコルソン／モーガン・フリーマン／ショーン・ヘイズ／ロブ・モロー／ビバリー・トッド（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2007年アメリカ映画／97分）

……2人合わせてアカデミー賞ノミネート16回、受賞4回というジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンの初共演は、「余命6カ月宣告」というテーマに共感したため……？ 同じテーマの『象の背中』（07年）を観て、「日米の異同について論ぜよ」という問題を出せば、司法試験受験生たちはどんな解答を……？ 面白いテーマの映画だが、「地獄の沙汰もカネ次第」ということわざの延長として、「最高の人生の見つけ方もカネ次第」という現実も直視する必要があるのでは……？

2人の名優が、老人向けのおとぎ話を！

ジャック・ニコルソンは、アカデミー賞に12回ノミネート、うち『カッコーの巣の上で』（75年）と『恋愛小説家』（97年）でアカデミー賞主演男優賞を2回、『愛と追憶の日々』（85年）でアカデミー賞助演男優賞を受賞している。他方、モーガン・フリーマンはアカデミー賞に4回ノミネート、うち『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）でアカデミー賞助演男優賞を受賞している。しかも年齢は、ジャック・ニコルソンは1937年4月22日生まれ、モーガン・フリーマンは1937年6月1日生まれだから、白人と黒人の違いこそあれ、同じ時代のアメリカを生きた名優。

日本では現在、後期高齢者医療制度が大問題となっているが、その分岐点は75歳。ジャック・ニコルソンもモーガン・フリーマンも後期高齢者となる直前だから、熟年という表現は不適切で、やはり老人と言うべき……？ 他方、映画の設定は2人とも約80歳だから、まさに日本で言えば後期高齢者。そんな2人の老人名優の共演はもちろん今回がはじめてだし、後にも先にも今回限り……？

2人の共演が実現した理由は単純。つまり、それまで全く縁もゆかりもなかった2人が、たまたま同じ病室に入り、共にガンによって余命6カ月と宣告されるというストーリーのため。そんな重々しいテーマをジャスティン・ザッカムの脚本にもとづき、ロブ・ライナー監督が老人向けのおとぎ話に……。

『最高の人生の見つけ方』 vs. 『象の背中』

末期ガンで宣告された初老の男の物語は黒澤明監督の『生きる』（52年）が有名だが、近時の問題作は、秋元康の原作を井坂聡監督が映画化し、役所広司が主演した『象の背中』（07年）。ガン宣告によって余命6カ月と宣告される点は『最高の人生の見つけ方』と同じだが、『象の背中』の主人公は中堅建設会社の部長職にある48歳の働き盛りという点が全く異なるもの。したがって、『最高の人生の見つけ方』では、余命6カ月宣告を受けた2人が、気も狂わんばかりに苦悩する姿は見せなかったが、『象の背中』の主人公がそうはいかなかったのは当然。しかし、現実が現実。余命6カ月の現実を受け入れた役所広司演ずる藤山が、以降それまでに出会った大切な人たちと直接会って自分なりの別れを告げようと友人めぐりを続けていく、というのが面白い視点だった（『シネマルーム16』382頁参照）。

しかし、根が陽気なヤンキーたちの発想は、生真面目な藤山とは大きく異なるようだ。2人の老人の冒険旅行（？）が始まったそもそもの発想は、生真面目なカーター・チェンバーズ（モーガン・フリーマン）が秘かに書いていた、この映画の原題『THE BUCKET LIST』すなわち「棺おけリスト」という哲学的なもの……？ したがって、その内容は「荘厳な景色を見る」「赤の他人に親切にする」「涙が出るほど笑う」などだった。ところが、エドワード・コール（ジャック・ニコルソン）が加わって書いた「棺おけリスト」は、「スカイダイビングをする」「ライオン狩りに行く」「世界一の美女にキスをする」など奇想天外なものに広がったため、実にバラエティ豊かに……。

もっとも、これは余命6カ月宣告を受け入れた2人の老人が現実に棺おけリスト実現の旅に出る中で、少しずつ変更されたり、追加されたりしていくのだが、同じ「余命6カ月宣告」でも日米の相違がくっきりと……？

2人の主人公の人生は両極端

『象の背中』の主人公は1人だったが、『最高の人生の見つけ方』の面白いところは、同年齢で余命も同じという2人の老人を同じ病室に入れることによって、「死と向かい合う」という点は共通点を設けながら、それまでの80年の人生は両極端な設定としたこと。

まずカーターは個人的な夢や計画を封印し、家族のために46年間も自動車修理工の仕事を続けてきた挙げ句、今回の余命6カ月宣告を受けたもの。他方、実業家として大成功を取めたエドワードは、金を生み出すため1分1秒も無駄にしないで生きてきた挙げ句、今回の余命6カ月宣告を受けたもの。率直に自分の運命を受け入れ、学生時代の哲学の講義で学んだ「棺おけリスト」を秘かに作成していたカーターに対して、エドワードは当初病室にも最高級の食材を持ち込んで食べたりしていたが、その結果は無惨なもの。そこでやっとエドワードも、余命6カ月という現実を受け入れざるをえないことに……。

カーターは今後6カ月をかけて、愛する妻バージニア（ビバリー・トッド）をはじめとするたくさんの家族との別れを告げていけばいいだけ（？）だが、エドワードは支配下にあるたくさんの会社の引き継ぎ処理や、過去4人の妻と結婚・離婚をくり返したため、そのプライベートな処理など大変な作業が必要。このように、それまで絶対に交わることのない両極端な人生を80年間歩んできた2人が、同じ病室に入ったのは偶然だが、赤の他人だった2人を結びつけたのが、「棺おけリスト」！

地獄の沙汰もカネ次第

日本には「地獄の沙汰もカネ次第」ということわざがあるが、さてアメリカには……？ 原題の『THE BUCKET LIST』（棺おけリスト）に対して、邦題の『最高の人生の見つけ方』は、2人の主人公が織りなす余命6カ月の過ごし方に着目したおしゃれなタイトル。しかし、この映画を観て私が思うのは、「最高の人生の過ごし方もカネ次第」ということ……。

アメリカ発のサブプライムローン問題は、あらためてアメリカの格差社会の実態を浮かびあがらせたが、日本でも「ワーキングプア」が深刻化している。ちなみに、小林多喜二のプロレタリア文学の金字塔『蟹工船』が若者たちのブームになるという何

とも異様な現実を見ていると、「絶対的貧困」の下では「幸せ」はおろか「最高の人生」なんて夢のまた夢と言わざるをえない。この映画は、たまたまエドワードのキャラが、かつてわが国を席卷したホリエモンこと堀江貴文以上の大物実業家だから、最高級のレストラン、スカイダイビング、レーシングから、プライベートジェット機に乗ってのピラミッド、エベレスト、万里の長城を股にかける旅まで何でもオーケー。しかし、同じ余命6カ月宣告でも、金のない貧乏人同士の2人という設定であれば、さてどうやって最高の人生の見つけ方を……？

そう考えると、「最高の人生の見つけ方もカネ次第」という、実に厳しい結論が出てしまうのだが……。マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』その他の文献（特に『ゴータ綱領批判』）で、共産主義の第1段階から真の共産主義が実現した時代には、「労働に依じてとる」から「必要に応じてとる」という形に発展・進化すると分析した。そんな理想郷（？）に思いを馳せながら、余命6カ月宣告を受けた80歳の老人2人のおとぎ話をタップリと楽しみたいものだ。

日本版「棺おけリスト」も面白いのでは……？

この映画はジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンという1937年生まれの2人の名優の共演によって実現したが、その描き方はあくまでヤンキー流かつハリウッド流。しかし、余命6カ月宣告を受けた2人の老人の「棺おけリスト」というテーマは万国共通だから、日本発のホラー『呪怨』（02年）がハリウッドや韓国でリメイクされたように、日本でも十分にリメイクすることが可能。しかも前述のように、75歳未満と以上で線引きした「後期高齢者医療制度」が大問題となっている今、日本で75歳の老人で、余命6カ月宣告を受けた両極端な男2人を主人公とした映画をリメイクすれば面白いのでは……？

そこで問題は、2人で合計アカデミー賞16回ノミネート、受賞4回という75歳前後の名優2人を採さなければならないが、それを日本で採せば、三國連太郎（1923年生まれ）は別格として、さしずめ高倉健（1931年生まれ）、仲代達矢（1932年生まれ）、菅原文太（1933年生まれ）、緒形拳（1937年生まれ）あたり……？ そうすると、『THE BUCKET LIST』を監督したロブ・ライナー監督に対抗して、日本で立候補する勇気ある監督は、果たして誰……？

2008(平成20)年5月19日記